

企業探訪

TOP INTERVIEW

坂東工業株式会社

代表取締役会長 狩野 貞男 氏
取締役社長 山川 泰之 氏
取締役 狩野 明美 氏



坂東工業株式会社
取締役社長 山川 泰之氏

坂東工業株式会社
取締役 狩野 明美氏

坂東工業株式会社
代表取締役会長 狩野 貞男氏

筑波総研株式会社
代表取締役社長 木村 伊知郎

株式会社筑波銀行
古河支店長 伊藤 博之

社会のあらゆるニーズに応える建物を 提供するプロフェッショナル集団

本 社：茨城県古河市上砂井128
創 業：1964年1月8日
従業員数：33名（2022年12月末現在）
事業概要：建築工事一式、土木工事一式
建築、土木工事の計画その他建設工事に関すること

インタビュー日：2022年10月18日
〔聞き手：筑波総研(株) 代表取締役社長 木村伊知郎〕
取引支店：(株)筑波銀行 古河支店

1964年創業、 創立60周年の総合建設会社

貴社の歴史と事業内容についてお聞かせください。

当社は1964年1月に建築士であった私の義父、粕川幸が猿島郡総和町（現古河市）に創業した建設会社です。創業時の資本金は120万円でしたが好景気に支えられ、その後、順調に事業規模を拡大、1987年6月には資本金を2,040万円に増やすとともに、新社屋を建設しました。

1992年5月に義父が亡くなり、私、狩野貞男が代表取締役社長に就任しました。義父の時代は主に公共施設や民間企業の建造物を請け負っていましたが、1991年のバブル崩壊をきっかけに大型受注が減少、建設業界には厳しい時代が到来し、それまでのような大型の建造物を中心とした受注だけでは生き残れない状況となり、事業の見直しを図ることとなりました。

その頃、各住宅メーカーでは、自社物件のメンテナンスを中心としたリフォーム部門を設立する流れがありました。また、90年代後半になると、付加価値を高めるように作り変える『リノベーション』が注目されはじめたため、当社も個人住宅のリフォーム事業へ踏み出すことを決め、2001年に㈱INAXの住宅リフォームフランチャイズ「INAXリフォームLIFA」に加盟、本社敷地内に「LIFA古河」をオープンしました。

その後、2015年に「INAXリフォームLIFA」が「LIXILリフォームショップ」に改称されたことで「LIFA古河」を「LIXILリフォームショップ 坂東工業 古河店」へと名称変更し、同時に坂東市辺田の国道354号沿いに同坂東店と坂東工業㈱坂東営業所をオープンしました。さらに、2017年にはつくば市研究学園に「LIXILリフォームショップ 坂東工業 つくば店」をオープンしました。

2021年7月、役員改選を実施し、山川泰之が社長に、私、狩野貞男が会長に就任しました。現在は、一般住宅やマンション、店舗、大型公共施設、病院など、社会のあらゆるニーズにお応えする建物を提供する総合建設会社として、社会に貢献し続けています。そして、2023年1月、創立60周年を迎えます。



これまでの歴史を語る狩野会長



現場監督もこなす山川社長



会長を支える奥様 狩野取締役



取材時の様子

質実剛健を貫いた先代

ホームページに記載されている「質実剛健」についてお聞かせください。

質実剛健とは、真面目で飾り気がなく、心身ともに強くたくましいことを言いますが、創業者であった義父、粕川はそのような人物でした。私は当社を受け継いだ者として、義父のようになれたらと、この言葉をホームページに掲げています。

義父はもともと公務員で、主に建設関連の業務を担当していました。その後、公務員を辞職して建設会社に入社すると建設関連の業務知識を学び、実務経験を積みました。さらに設計事務所にて設計業務を学び、2級建築士の資格を取得しました。そして、1964年1月、39歳の時に当社を立ち上げました。

無口、頑固、几帳面を絵にかいたような人間で、曲がったことは大嫌い。筋が通らない仕事は受け付けませんでした。そのため、「個人との取引で儲けるつもりはない」。そう言って一般住宅には手を出さず、亡くなるまでその姿勢を貫きました。

創業当初から同社を支え続けた 同社の番頭こと元専務

義父をサポートし続けてくれたのが、当社の番頭といわれた元専務の中島敏夫です。彼は中学卒業後、家業の大工で見習をしていますが、義父が当社を立ち上げた際に入社し、その後、29歳の時に2級建築士の資格を取得、さらに高校卒業の資格を取得するため、仕事をしながら定時制高校に通い、33歳の時に古河第一高等学校を卒業しました。その後も土木・建設に関わる様々な資格を取得しており、多能工とは、彼のような人を指す言葉だと思っています。

とにかく仕事一筋で、義父をサポートしながら社員をまとめ、引っ張ってくれました。当社の発展は、彼の力によるところが大きかったと思います。風邪一つひかず、休むこともなかったため、ずっと元気でいてくれると思っていましたが、病気を患って入院しました。創業60周年を楽しみにしていましたが、残念なことに昨年亡くなりました。



本社内で事務を行う女子社員

義父からの依頼で入社するも 複雑な日々を過ごす

会長のこれまでについてお聞かせください。

私は設計士として、結婚後も設計事務所に勤務しており、将来的には独立して自分の設計事務所を持ちたいと考えていました。

35歳の時に義父に呼ばれ、「俺がこの会社を起こしたのは39歳の時だ。お前が設計事務所を開くにしてもあと4年もある。だから4年間俺の仕事を手伝ってくれ」と言われました。そこで私は断りきれず、設計事務所を辞めて当社に入社しました。

入社はしたものの、私は設計の仕事を諦めることができませんでした。そのため、友達や先輩のいる事務所から仕事をもらい、設計の仕事を続けていました。すると、ある日、義父から「設計の仕事は他の誰かに頼めないのか？」と言われてしまい、複雑な気持ちで日々を過ごすようになりました。



本社での確認作業

設計士の道を諦め、建設業へ

義父に依頼された4年が経過しても、何の言葉もありませんでした。今思えば、重宝されていたのかもしれない。

そうした中、私が42歳の時に義父が急逝したため、ついに、設計の継続を断念せざるを得ない状況となりました。義父が亡くなったからといって、請け負っていた仕事を放置するわけにはいかないからです。私は代表者として建設業に集中することになりました。

引継ぎもなくいきなり会社を継いでしまいましたが、社員を路頭に迷わせるわけにもいかず、見様見真似でどうにかこうにか一日一日を乗り越えていきました。ありがたかったのは元専務や現社長の山川、妻がいろいろとサポートしてくれたことです。私は設計には自信がありましたが、建設は分からないことが多く、彼らのサポートなしには乗り越えることはできなかったと思っています。

また、社員も頑張ってくれました。義父が作った歴史でもありますが、当社の役職員は多能工が多く、一人ひとりの守備範囲が広いため、他の建設会社では工程ごとに外注している作業を全て自分たちで行っていました。そのようなことから、様々な仕事を請け負うことができました。

……とはいえ、現在は1つ1つの作業のボリュームが大きくなり、自分たちだけでは仕事をこなすことが難しくなっていることから、サポートしてくれる下請け会社は既に50社を超えています。

役職員のおかげで苦難を乗り越えることができ、2013年1月、当社は創立50周年を迎えることができました。そこで、創立50周年記念と、日頃頑張ってくれている役職員へのねぎらいを兼ねて、同年7月に祝賀会を開催しました。また、同時に今後さらに発展していけるよう、第1回経営計画を発表し、新たな道を歩き出しました。

それからさらに10年が経過し、2023年1月に60周年を迎えます。いろいろ苦労しましたが、様々な人に鍛えられ、その結果として今があると考えています。



本社外観

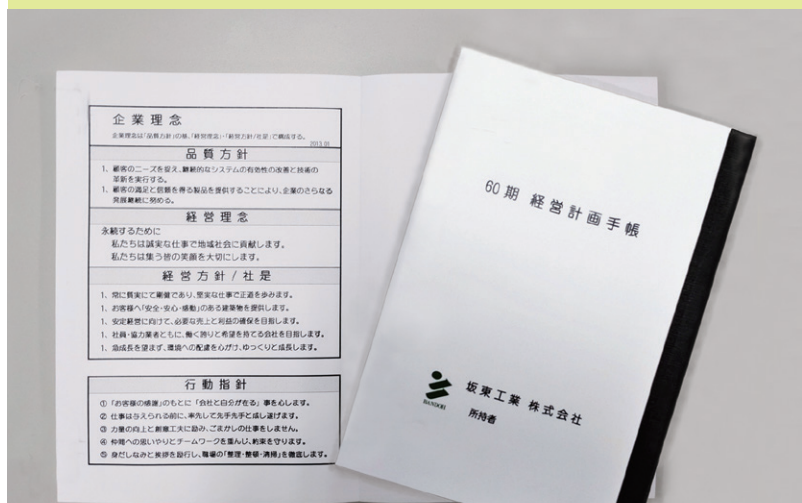
決算期ごとに経営計画手帳を作成 説明会で社員の意識統一を図る

経営計画について教えてください。

創立50周年から決算期ごとに経営計画を策定し、その内容を記した手帳を作成しています。社員全員が内容を理解し、一緒に業務に取り組んでいけるよう、每期、期のはじめに社員を集めて説明会を開催しています。

～経営計画手帳の内容～

- 企業理念（品質方針、経営理念、経営方針 / 社是）
- 行動指針
- 経営計画発表にあたり（代表者挨拶）
- 前期 経営目標
- 前期 経営戦略（営業戦略、顧客戦略、商品戦略、組織・人材戦略）
- 前期 事業目標（売上高、売上原価、粗利益、販売管理費、人件費、営業利益、特別償却、経常利益、人員計画）
- 当期 事業目標（売上高、売上原価、粗利益、販売管理費、人件費、営業利益、特別償却、経常利益）
- 当期 経営・品質目標
- お客様に関する方針
- 経営に関する方針
- 社員に関する方針
- 業務日報に関する方針
- 施工管理に関する方針
- 組織に関する方針
- 部門に関する方針
- ミス・クレームに関する方針



60期 経営計画手帳

社会のあらゆるニーズに対応する建設業

貴社の得意とする分野は何ですか。

建設には、木造、鉄骨、鉄筋など様々な工法がありますが、当社には得意とする分野がありません。これは裏を返せば、何でもできるということです。建設は設計図面に基づいて行うものですから、設計図面がしっかりとしていればどのようなものでも対応できます。もちろん、「これが得意だ」とする建設会社もあると思いますが、お客様のどのようなニーズにも対応できることが当社の強みであり、誇りです。

当たり前のことをちゃんとする 努力を怠らないことが大切

貴社が伸びた理由をお聞かせください。

施主様からは、「坂東さんはしっかりしている」「計画通りにすすめてくれるので安心だ」といった言葉をよくいただきます。図面通り、計画通りに進めることは当然のことだと思うのですが、それが出来ていない業者も結構あるのかもしれませんが。この「当たり前のことをちゃんとする」ことの積み重ねが、当社の成長につながっているのだと思います。

この辺りは土地柄もあり、あまり多くの物件はありません。それを数ある建設会社で取り合うわけですから、請け負った仕事は1つ1つきちんとこなして、お客様にご納得いただける形で引き渡ししなければいけません。

現在のようなサプライチェーンに大きな影響が出ている状態では工程表通りに進まないこともありますが、どのようなことがあってもしっかりと進められるよう、常に当たり前のことをちゃんとする努力を怠らないことが大切なのだと思います。

また、元専務の力が大きかったと思います。自分から何でも進んで行き、当社を牽引してくれました。一級技術者が10人在籍していることも、当たり前のことをちゃんとできる要因だと思います。



作業の様子

設計士だからこそできること

設計士としての経験が強みになったことはありますか。

設計の知識があり、設計事務所の先生との会話がスムーズに進められるため、「お前は普通の土建屋じゃないな」と気に入られて、様々な仕事をいただきました。また、取引先の会社や工場に出入りしていると、ある程度大まかな図面を描いて形を決めてから営繕工事をしなくてはならない部分が見えてきます。その部分を提案し、受注につながったことも少なくありません。

そのほかでは、当社は設計事務所の登録をしていないため、設計は外注していますが、実は、設計施工の依頼が数多くあります。そういう時に設計士としての経験と知識が生きてきます。大まかな方向性や規格が見えてくるので、外注する前にいろいろと考えたり、指示を出したりすることができます。これは、私のように設計士として活動した経験がないと難しいことだと思います。

こうして考えると、現場の経験は少ないものの、私も当社の発展に十分に寄与できたと考えています。



LIXILリフォームショップ 坂東工業 古河店

迷いながらもリフォーム事業へ参入

貴社のリフォーム事業についてお聞かせください。

リフォーム事業をはじめたきっかけは、バブル崩壊以降大型工事の受注が減少したことです。実際にリフォーム事業に参入したのは2001年で、バブル崩壊から約10年後のことになりますが、その間も景気は回復することなく、建設業界は、高度成長期やバブル崩壊前のような状態には戻りませんでした。

義父の時代はどうしても頼まれない限り、一般住宅の受注を請け負いませんでした。そのため、私がその方針を勝手に変えていいものかととても悩みましたが、既に仕事を選んでいただける時代ではなくなっていること、リフォーム事業に参入しても「質実剛健」の精神は失われないこと、経営状況が悪くなれば当社を次代に引き継ぐことも、社員を守ることもできなくなることから、最終的には参入を決断しました。



坂東営業所兼 LIXILリフォームショップ 坂東工業 坂東店

リフォームショップが広告塔へ

リフォーム業界は、だいぶ前から何兆円市場だとか、リノベーションが伸びているなどの話がありますが、既に多くの業者が参入し、競争も激しいのが現状です。しかし、本業でお付き合いをいただいている方から、「坂東さん、リフォーム事業もしているなら、うちも頼むよ」と個人的に頼まれることがあり、思っていた以上に当社の広告宣伝に役立っているようです。



LIXILリフォームショップ 坂東工業 つくば店

つくば市に第二の拠点を構えて 新たな一歩を踏み出す

今後の展望についてお聞かせください。

本業である建設部門は、創業以来ずっと古河市を中心に展開してきましたが、ここ数年、古河市だけで事業を成り立たせるのが難しくなっています。そのため、つくば市へ進出することを決めました。その足掛かりとして2017年に「LIXILリフォームショップ 坂東工業 つくば店」を研究学園地区にオープンしました。現在の店舗は賃貸物件ですが、いずれは自前の店舗を構える予定で、既に同地区に土地を購入し、建築工事が始まっています。店舗の建築が済み次第、建設部門もつくばで営業を開始する予定です。

コロナ禍に始まったエネルギー価格の上昇は、ロシア、ウクライナの戦争で拍車がかかり、サプライチェーンの混乱による資材価格の上昇、半導体不足による住宅設備の供給不足など、建設・リフォーム業界ともに厳しい環境です。しかし、これまで当社は何度も苦境を乗り越えてきました。役職員一丸となってこの苦境を乗り越え、創業70周年に向けて、また、新たな一歩を踏み出そうと思います。



左から、山川社長、狩野会長、狩野取締役